

VS 語順の二、三の含意について

越 後 周 造

Otto Jespersen はその著 *Growth and Structure of the English Language* (1930) の序説に当るところで、word order について述べている。そこに彼は主として19世紀のイギリスの作家の詩や散文について学生達が調査した SV 語順 (SVO 語順を含めて) の percentage を挙げている。

Shelley, 散文89, 詩85.

Byron, 散文93, 詩81.

Macaulay, 散文82.

Carlyle, 散文87.

Tennyson, 詩88.

Dickens, 散文91.

Swinburne, 詩83.

Pinero, 散文97.

これらの作家と比較するため、Jespersen はデンマーク、ドイツ、スランス、イタリア、並びに古代英語の作家についても、同様な統計的な percentage を示している。

Jacobsen (デンマーク) 散文82.

Drachmann (デンマーク) 詩61.

Goethe (ドイツ) 詩30.

Tovote (ドイツ) 散文31.

Anatole France (フランス) 散文66.

Gabriele d' Annunzio (イタリア) 49.

Beowulf (古代英語) 16.

King Alfred (句代英語) 散文40.

以上の数字に関連して、Jespersen は2つの事実に着目している。その一つは Old English では、Modern English ほど SV 語順が高い規則性を示していないことである。これはよく知られていることで、O. E. は高度の屈折語尾を持っていたので Mod. E. よりも遥かに語順が自由であったのである。彼が着目している今一つは日常屢々使われる多くの表現において、デンマーク語、ドイツ語では VS 語順又は vSV 語順をとるに対して英語 (この場合 Modern English) では SV 語順をとることが多いことで、この点を幾つかの用例を引いて説明している。今それらの引用例を挙げることにする。

1. { Dær har jeg ikke været.
Dort bin ich nicht gewesen.
I haven't been there.
2. { Det kan jeg ikke.
Das kann ich nicht.
I can't do that.
3. { Det veed jeg ikke.
Das weiss ich nicht.
I don't know (that).
4. { Nu kommer han.
Jetzt kommt er.
Now he comes.
5. { Dær går hun.
Da geht sie.
There she goes.

用例4. 5. の英語の場合 *Now comes he. There goes she.* という語順は二、三百年以前までは普通に行われていたことを注意している。もっとも現在の英語でも名詞が **subject** になると *There goes the train.* のように倒置して VS 語順をとることは周知の通りである。又代名詞が **subject** となる時にも *So am I. Neither did he.* のように **Modern English** でも、ある *nuance* をもって VS 語順をとる場合のあることも事実なのである。

さて上掲の引用 2. 3. *Det kan jeg ikke. Das weiss ich nicht.* 所謂 OVS 文型は暫く措くとして、引用例 1. 4. 5. *Dær har jeg ikke været. Dort bin ich nicht gewesen. Nu kommer han. Jetzt kommt er.*

または *Neither did he.* など **adverb+VS** 或は **adv.+vVS** 文型を、ある学者は掩蔽前置法 (*gedeckte Anfangsstellung*) (相良守峰：ドイツ文法 p. 236) と称し、動詞が直接文頭に立つ VS 語順、これを純粹前置法 (*reine Anfangsstellung*) と称して区別している。今、純粹前置法の **Old English** の一例を挙げれば *Gegrētte thā guma otherne.* (*Then the one man saluted the other.*) (Quirk & Wrenn: *An Old English Grammar* p. 94) のような場合である。

このように動詞が直接文頭に置かれる VS 語順の持つ二、三の含意を探ることが本論の目的である。

ところで SV 語順がゲルマン祖語更にインド、ヨーロッパ祖語以来どのような歴史的経過を辿って来たかを今一度確認して置くことが好都合であると考えるので、John Ries の *Die Wortstellung im Beowulf* の該当の所説から引用することにする。

Das habituell wichtigste Wort-für den einfachen unabhängigen Aussagesatz-war das Subjekt, dann folgten die übrigen nichtverbalen Bestandteile des Satzes, den Schluss machte das verbum finitum……So laufen die vom Standpunkt der indogermanischen und dem der

germanischen Sprachforschung gewonnenen Ergebnisse an einem Punkte zusammen : von beiden Seiten gelangen wir mindestens zu einem beträchtlichen Grade von Wahrscheinlichkeit für dieselbe Hypothese : führen die Wege der in den germanischen Einzelsprachen nachweisbaren Entwicklung aufwärts zum Urgermanischen nur zur Schlussstellung des verbums als dem Grundtypus der Wortfolge, so weisen andererseits die zu erschliessenden Pfade von der indogermanischen Ursprache zum Urgermanischen wieder nur auf denselben Typus. (ibid. p. 31) 即ちこれに依ると、単文の平叙文においては通例一番重要な **subject** が、ついで文の残余の非動詞的構成要素が続き、定動詞 (**finite verb**) が文の末尾をなしていた。

インド・ゲルマン語の研究及びゲルマン語の研究の両方の立場から得られた結果は一つの点で合致する、ゲルマン系の個々の言語からゲルマン祖語へ遡る発達の道筋もインド・ゲルマン祖語よりゲルマン祖語へと辿られる経路も上記の S + 非動詞的要素 + V の語順想定を相当確実に裏付けるのである。

本 論

上に見て来たように、単文の平叙文に関する限り **SV** 語順は印欧語系及びゲルマン語系において基本型として発達したことがわかる。従って動詞を文頭に立てた **VS** 語順は単文の平叙文 (**der einfache, unabhängige aussagesatz, simple declarative sentence**) において副次的語序として発達したと考えることが出来る。

次に **VS** 語順 (掩蔽前置法 **gedeckte Anfangsstellung** をも含めて **Karl Brugmann** の **Kurze vergleichende Grammatik der Indogermanischen Sprache** から引用することにする。

Das orthone Verbum für sich oder die aus orthotonem Präverbium und enklitischem Verbum bestehende Gruppe (Typus *ni padyate*) hatten in der Erzählung, wo es meist in erster Linie auf die Geschehnisse ankommt, von je her gerne Anfangsstellung, teils im Beginne einer Erzählung überhaupt (ai. *āsīd rājā nalō nāma* 'es war einmal ein König Namens N.,' *asti khalv indradyumna nāma sarah* 'es gibt einem Teich Namens I. '), teils in der Weiterführung der Erzählung inner der aus einer Reihe von Sätzen bestehenden Darstellung. Diese Ordnung in der Erzählung hat sich in weitem Umfang erhalten im Germ. und Slav., weniger im Ai. und Griech., noch weniger im Lat. (ibid. p. 683)

即ち強勢をもつ動詞自体または動詞に先行する強勢をもつ部分とそれに前接する強勢を失った動詞からなる語群 (例, *ni padyate* (Sanskrit) = **He falls down.** 筆者試訳) は多くは、先づ第一に出来事に重点が置かれている物語において、古くより物語の発端のところに、又は一連の文から成立つ叙述の中で物語を運んでゆく過程で、よく文頭の位置を占めた。物語におけるこの語順はゲルマン語とスラヴ語に広範囲に維持されており、それらについて古代インド語及びギリシヤ語に存在

し、ラテン語には更に少くなっている。

K. Brugmann は上記の引用文中に **sanskrit** から物語の発端で文頭に置かれた動詞 **as (=be)** の例を二つ挙げている。第一の用例は **āsīd rājā nalo nāma**. である。ここで **āsīd** は **parasmāi-pada** 為他語尾 **√as** の **indicative** 第一過去 **third person singular** である **āsīt** が母音 **ra** の前で末尾の子音が有声化して **āsīd** となったものである (cf. 榊亮三郎, 梵語学 p. 111)。そこで Brugmann は **Es war einmal ein König Namens Nalo**. と云う訳語を与えている。次に第二の用例は **asti khalv indradymna nāma saraḥ**. この文で **khalv** は **expletive**, **saraḥ=Teich, pond** で **asti** は同じく動詞 **√as** の為他語尾, **indicative** 現在 **third person singular** である。そこで Brugmann は **Es gibt einen Teich Namens Indradymna**. と云う訳語を与えて、これを現在の意味に解釈しているが、過去の意味に解釈することが出来るのである。現に榊博士の梵語学にも **asti** で始まる物語二十数例を数えることが出来る。博士はこれらの場合過去の意味を附与する **particle** 不変化詞 **'sma** が省略されたものとして、過去の意味に解釈されているのである。今榊博士の上記著書から博士の和訳を添えて二、三の用例を引用することにする。

1. **Asti kasmimçcit parvate Maka-vikramo nāma simhaḥ**. (或る山に於て、「マハーヴクラマ」(大威力)と名づくる獅子ありき。) (ibid. p. 156) **kasmimçcit=some**, **parvate** は **parvata (=mountain)** の **locative**, **nāma** は **named** と云う意味の副詞, **simhaḥ=lion** である。2. **Asti Devī-kotta-nāmnī nagare Devaçarmā nāma brāhmanah** (「デヴーコッタ」と称する都城に「デーヴシャルマン」と名づくる婆羅門ありき。 **nāmnī** は **nāman (=name)** の, **nagare** は **nagara (=city)** の夫々 **locative** である。3. **Asti Varānasyām Karpūrapato nāma rajakaḥ**. (波羅奈斯の都に於て「カルプーラパタ」と称する染絲者ありき。 **Varānasyam** は **Vārānasi (=今の Benares)** の **locative**, **rajaka** は辞書によると **a washerman (so called from his cleaning or whitening clothes; regarded as a degraded caste)** とある。以上によって大体 **Sanskrit** の物語の発端のところで、文頭に立つ **asti** の様子を覗い知ることが出来ると思う。さきに引用した Brugmann の文中に、**Sanskrit** と同程度に **Greek** にも **VS** 語順が見られるとあるので、その若干の用例を J. A. Nairn & G. A. Nairn の **Greek through Reading** から引用することにした。

Ἔστι καὶ νῦν Ἀθήνῃσι Θεάτρον ὃ Διονύσου καλεῖται. φέρει δὲ τὸ ὄνομα τοῦ θεοῦ ὃν ἐτίμων ἐν τοῖς δράμασιν. τούτων δὲ τῶν δραμάτων τὰ μὲν τραγῳδίαί, τὰ δὲ κωμῳδίαί. ἡθεῖον γὰρ οἱ Ἀθηναῖοι οὐ μόνον δακρύειν ἐπὶ ταῖς τραγῳδίαις, ἀλλὰ καὶ γελᾶν ἐπὶ ταῖς κωμῳδίαις. (ibid. p.11)

(*筆者試訳=There is still a theatre at Athens, which is called after Dionysus and bears the name of the god whom they revered in the dramas. Of these dramas some were tragedies, others comedies. For the Athenians wanted not only to weep over the tragedies, but also to laugh over comedies.) 上の引用文中には2度 **VS** 語順 (夫々 underline をした部分) が現れている。殊に最初の例では **ἔστιν** は **ἐμύ=be** の **indicative present third person singular** で筆者が先に引用した **Sanskrit** の第一例 **Asti kasmimçcit parvate……simhaḥ** (*=There was a lion in some mountain) と全く同一の文構造を示していることに注目したい。只 **parvate** が **locative** で

あるのに対して, locative case を欠く Greek では 'Αθηναῖοι と dative となっているだけである。次いで後の例では ἤθελον は ἐθέλω (=want) の indicative imperfect third person plural で主語の οἱ 'Αθηναῖοι (=the Athenians) に先行している。ここで VS の中間に理由を表わす particle 不変化詞 γάρ が介在しているのが特徴的で, これについては後程関説するであらう。次に Brugmann の云う物語の途中で, 筋を運ぶために使われる VS 語順の例を二例挙げることにする。

ἦν δέ ποτε καὶ πάλαι συνοδὸς ἐς τὴν Δῆλον τῶν μετὰ τῶν γυναικῶν καὶ παίδων, (*=Once in olden times there was a gathering of Ionians with their women and children into Delos. (ibid. p. 85)

ἦν δὲ ποτε τῶν 'Αθηναίων βασιλεὺς Κόδρος. (*=Kodrus was then king of the Athenians.)

以上によって簡単ながら, Sanscrit 及び Greek における VS 語順についての記述を終ることにする。前掲の Brugmann の引用文によると, 物語の発端及び中間 (これは筋を運ぶために) に VS 語順が広範囲に現れるのは, ゲルマン語とスラヴ語であると云う。

そこで Old English で書かれた代表的叙事詩 Beowulf を主として John Ries の Die Wortstellung im Beowulf によって, この作品の中に現れる VS 語順の表わす含意を探り, これと対比的にロシア語に於ける VS 語順に触れてみたいと思う。

VS 語順と云うとき, Brugmann の場合は概括的な記述であるため, 先に一寸触れた純粹前置法 reine Anfangsstellung と掩蔽前置法 gedeckte Anfangsstellung とを区別しないで論じている。ここで筆者が主として考察しようとしているのは前者純粹前置法即ち動詞又は助動詞が文頭に立つ場合である。

しかしながら John Ries は異った名称で論述を進めているので, 記載が前後する嫌いがあるが, 彼の所説を少しく伺うことにする。

彼に従えば, selbständige aussagesätze, independent declarative sentences 独立した平叙文が Beowulf 全体で1174, その中 SV (gerade Folge と称す) 語順が 726=61.8%, VS (ungerade Folge と称す) 語順448=38.2%, 従って VS 語順は平均して全体の 1/2 を少し上廻る比率で現れることになる。これは先に掲げた Jespersen の調査による Beowulf における SV 語順の16%と大きく開いているが, これは文の種類などを限定しない包括的な統計のとりかたによるものと考えられる。John Ries の方は文の種類によって細かく分析し, 単一な平叙文の SV 語順VS語順の数値を与えているので, この方がより有意義である。即ちこれによって, Beowulf においても SV が主要な支配的語順で, VS は副次的, 補足的な語順であることが明瞭に示されているからである。

さて John Ries の与えている SV 語順, VS 語順の数値は上に触れた掩蔽前置法 gedeckte Anfangsstellung の場合を含めて云っているのである。

gedeckte Anfangsstellung と云う名称であるが, Ries の意見によると他の学者によって使用されている Spitzenbestimmung (文頭規定語) は文頭に立つ副詞的規定語にのみ適当した名称で稍長きに失する, それで彼は範囲が明確でない嫌いがあるがより包括的名称として Spitze (文頭語) と云う語を採用している。この試論の初頭で触れた通り, ゲルマン語系では Ries の所謂 Spitze の

有無によって、それ以下の語順に影響することは明かである。Old English の叙事詩 Beowulf についてもこのことが云い得られ、Ries はこの作品の中に見られる単一な平叙文を ohne Spitze と mit Spitze とに分けて、次のような数値を与えている。ohne Spitze のとき VS 語順33.1% mit Spitze のとき……VS 語順45.7%である。即ち文頭語のないとき VS 語順の数値は約⅓であるに対し、文頭語のある時……VS 語順の示す数値は約半数に近くなる。

文頭語を構成する語の Silbenzahl (音節数) と Tonstärke (強勢の度合) 更に Beowulf が韻文で書かれているだけに Metrum (韻律) が語順の決定に影響していることが考えられるが、これについては Ries は次のように云っているのである。

Der Vergleich mit der alteren angelsächsischen Prosa und im allgemeinen unsere Kenntnis der altergermanischen Sprache und Dichtung erlauben aber, mit ziemlicher Sicherheit zu behaupten dass die metrischen Einflüsse auf die Wortstellung im Beowulf nicht nur überhaupt verhältnismässig gering gewesen sein müssen, sondern dass sie sich im wesentlichen auf minder wichtige, den Gesamtcharacter der Wortfolge und des Satzbaues weniger berührende Punkte, und auf die unregelmässige Stellung in gewissen Sonderfällen beschränkt haben werden. Schon weil im Stabreimvers Satzrhythmus und Versrhythmus zusammenfallen (der letztere wieder nur Stilisierung des ersteren) ist nicht anzunehmen, dass die Wortfolge im ganzen, in ihren Grundzügen und Hauptgesetzen vom Einfluss des Metrums in beträchtlichem Masse berührt und verändert worden sein könne (ibid. p. 70) 即ち古代英語の散文や古代ゲルマン語に関するわれわれの知識と比較することによってヴェオウルフにおける語序に対する韻律の影響は僅少であった計りか、本質的に左程重要でない、語序や文の構造の性格と余り関係のない点や特殊な場合の不規則な配語に限られていたと主張し得ることは可成り確かである。詩の韻律とは文体としての文のリズムに外ならず、文のリズムは古代英語においては頭韻詩に集約されているので、語序が一般にその根本的特色や基本的規則において韻律の影響を相当に受けて変化したとは思われないのである。

だからと云って Ries はリズムの語順に対する影響を全く否定するのではない。彼は文頭語のある文では、その音節数や強勢の程度を、又すべての文について主語が名詞 (一般に強勢) であるか代名詞 (一般に弱勢) であるか、又動詞が full verb (一般に強勢) であるか或は助動詞や叙法動詞 (modal verb) (一般に弱勢) が先行しているかを考察する。そしてこれらを語順を規定する外的原因 (äussere Gründe) と呼ぶのである。

この小論では初めに述べたように、所謂純粹前置法 (reine Anfangsstellung) 即ち文頭語のない文 (Sätze ohne Spitze) を主として論じようとするので、文頭語を抜きにして語順を規定するとするその他の外的原因について Ries の見解を次に覗うことにしたい。

So ergibt eine vergleichende Betrachtung der geraden und ungeraden Folge in syntaktisch gleichen, rhythmicch aber ungleichen Gefügen, dass die Wahl dieser beiden Stellungen in beträchtlichem umfang von der rhythmischen Schwere einerseits des Verbums abhängig ist.

Denn es macht wie aus früheren untersuchungen bekannt ist und im folgenden für den Beowulf ausführlich dargestellt, für die Häufigkeit des Auftretens jener beiden Stellungstypen einen wesentlichen unterschied, ob das Subjekt von einem nominalem oder von einem pronominalem Wort gebildet wird, ob das Verbum ein Vollverb oder ein Hilfsverb ist. In beiden Fällen ist der Unterschied ein rhythmischer und zwar derselbe: Pronomina und Hilfsverba sind bis auf seltene Ausnahmefälle tonunfähig und stehen hinter dem Nomen und Vollverbum an rhythmischen Gewicht bedeutend zurück. Diese gleichen rhythmischen unterschiede üben nun auf die Wortstellung die entgegengesetzte Wirkung aus: leichtes Subjekt begünstigt die gerade, leichtes Verbum die ungerade Folge; …… (ibid. p. 72)

即ち文章論的には同一であるが文のリズムでは異なる構文における SV 語順と VS 語順を比較して観察すると、これら二つの語順の選択が一方においては動詞のリズム上の比重に著しく左右されることが解る。けだし以前の研究から知られている通りに又ベオウルフについては以下詳細に述べるように、主語を構成するものが名詞であるか代名詞であるか、又動詞が **full verb** であるか助動詞であるかは、これら二つの語順の現れる頻度に大きな相異を生ずるからである。二つの場合とも差異は同じくリズムの差異であり、代名詞や助動詞は稀な例外の場合を除き強勢を持たず名詞や **full verb** とリズム上の比重において著しく劣るのである。このリズムの差異が対照的な影響を語順の上に及ぼす、即ち比重の軽い主語は SV 語順を取り、これに対して比重の軽い動詞は VS 語順を取ることが多いのである。次に文頭語のない単一な平叙文について語順を規定する外的原因の示す数値を簡単に引用する。

主語が名詞の場合	SV 語順	51.5%
“	VS 語順	48.5%
主語が代名詞の場合	SV 語順	77.7%
“	VS 語順	22.3%
Full verb の場合	SV 語順	71.2%
“	VS 語順	28.8%
助動詞の場合	SV 語順	50.6%
“	VS 語順	49.4%

夫々 **Ries** が上の引用文中で述べていることを実証している数値である。

語順を規定する上記のような外的原因に対して **Ries** はその内的原因を考える。そのところを引用すると、

Wenn man die Fälle gerader und die ungerader Folge auf ihren Gesamtcharacter hin genauer mit einander vergleicht, erkennt man unschwer gewisse unterschiede im Inhalt der Sätze, im ihrer stilistischen Wirkung, in der art ihrer syntaktischen Verwendung, kurz in Gebrauch und ‘Bedeutung’ der beiden Stellungstypen. Es werden also innere Gründe vorhanden sein müssen, die die Wahl des einen oder des anderen Typus bewirken oder

doch beeinflussen——was übrigens schon daraus zu schliessen ist, dass die rhythmischen Einflüsse nicht in allen Fällen zur Erklärung der Wortfolge ausreichen. (ibid. p. 118)

即ち SV 語順と VS 語順を全体的性質に従って互に仔細に比較するならば、文の内容、文章論的使い方、要するにこれらの二つの語順の用法や意味にいくつかの差異が容易に認められるのである。従って語順の選択を左右する内的原因が存在するに相異なるのである。——このことからリズム要因のみでは語順を説明するのに不充分であることが結論されるのである。

では次に文頭語のない単一な平叙文について VS 語順を規定する内的原因——換言すれば VS 語順のいくつかの含意を Beowulf の実例を踏まえながら John Ries の所説に従って考察することにした。

(1) Die ungerade Folge beruht häufig, in unmittelbarer Nachbildung Vorstellungsreihenfolge, auf der überwiegenden Wichtigkeit des verbbegriffs: auf diesen kommt es im gegebenen Zusammenhang allein oder vorzugsweise an, er bringt das sachlich Neue und Wichtige, während das Interesse an dem Subjektsbegriff zurücktritt.

Dieses besondere Verhältnis zwischen Subjekt und Verbum tritt zumal dann deutlich hervor, wenn das Subjekt kurz vorher schon genannt oder sonst aus dem Zusammenhang zur Genüge bekannt ist, derart dass es auch ohne besondere Bezeichnung durch ein Subjektswort— das ja in der Sprache des Beowulf oft genug auch wirklich fehlt— dem Bewusstsein gegenwärtig wäre, und das im gegebenen Falle mehr nur in der Art einer blossen Aufnahme, variierend mit neuem Substantiv benannt ist. (ibid. p. 137)

即ち VS 語順は表象系列を模写して動詞概念の圧倒的重要性によって起る場合が屢々ある。この動詞概念はそれだけで或は特に与えられた文脈の中で重要となり、新たな重要な材料を加える反面において主語概念に対する関心が後退する。主語がすぐ前で言及されるか若しくは文脈から十分に明瞭であり主語を特に述べなくとも——事実ベオウルフの言語では主語が屢々省略されるが——意識的には存在しており、又主語を更に採上げても変化をつけて新しい名称で言及するような時には、主語と動詞との間のこの特別の関係は明瞭に現れるのである。次に用例を見ることにする。

——ēode ellenrof 第358行 (=the valiant one went on) 以下断りなき限り括弧中に John R. Clark Hall の現代英語の散文訳を挙げる。この文の主語は前文から引続いて勇将 Wulfgar で、第356行の場合のように省略することも出来た。

——Mynte se mānscatha 第712行 (The wicked one thought……) se mānscatha は Grendel を云い換えたもの。

——Mynte se mæra 第762行 (=The infamous creature thought) 主語は前行の eoten (=giant) の云い換えである。

——ræhte ongēan feond 第747行 (=The fiend reached out towards……) 主語は se aglæca (=the monster) で省略することも出来た。

——fērdon folctogan 第839行 (=chiefs of the people came……) 主語は前行の gūthrin monig

(=many warriors) を指す。

—bær on bearm scipes……wæles eafora 第896行 (=The son of Wæls bore …… into the bosom of the ship.) 主語は第893行の aglæca=monster で第895行と同様省略も可能であった。

—wolde self cyning symbel thicgan, 第1010行 (=The kinghimself would take part in the banquet.)

—Gecyste thā cyning æthelum gōd 第1870行 (=Then the king, noble in lineage, kissed ……)

—Oferhogode thā hringa fengel 第2345行 (=Then did the lord of rings disdain……)

—Ongunnon thā on beorge bælfýra mæst wigend weccan ; (第3143～4 行) (=The warriors then began to kindle on the mount the greatest of funeral pyres ;) 主語の wigend (=the warriors) は前行に出ていた hæleth (=mighty men or warriors) と同一の人物を指し内容的に既知である。

Ries は該当の用例の出てくる箇所を尚多数指摘しているのであるが、このくらいにしてその他は割愛することにしたい。

主語が文脈から既知であるか新奇であるかは SV 語順, VS 語順の選択に相当重要な影響を及ぼすことは上掲の例からも推知することが出来るが, Ries によると名詞の主語に full verb の SV 語順の用例の中147文が新奇の主語で残りの43文 (=22. 6%) のみが既知の主語であり, 又 VS 語順の用例86文の中疑しいもの 5 例を除けば残る81文例中新奇の主語36文で既知の主語のもの45文 (=55.6%) であると云う。

(2) Die ungerade Folge ist die typische Form für den Fortschritt in der Erzählung. Die verwendung bildet im wesentlichen nur einen besonderen Fall der eben (unter (1.)) besprochenen und beruht in der Hauptsache auf der überwiegenden Wichtigkeit des im verbum verkörperten Begriffs. Das Zurücktreteten des Subjektsbegriffs ist auch in diesen Fällen häufig in dem Umstand mit begründet und äusserlich daran kenntlich, dass es aus dem Vorangehenden bekannt ist, doch braucht dies nicht gerade der Fall zu sein : die grössere Bedeutung der im Verbum ausgedrückten Vorstellung auch bei neu auftretendem Subjekt fliesst aus der Eigenart des Inhalts dieser Sätze. Das Verbum bezeichnet den Vorgang, nennt die Handlung, auf der der Fortschritt der Erzählung beruht ; das Verbum enthält das neue Begebnis, das zum Bekannten hinzutritt und die Erzählung vorwärts bringt ; der Verbalbegriff ist also der wichtigste im Satze und auf ihn konzentriert sich das Interesse. Sätze dieser Art sind aber für die epische Darstellung überhaupt von grösserer Bedeutung als die übrigen, sie sind in Flusse der Rede die Wellenberge, zu denen die Kraft des Ausdrucks anschwillt ; zwischen ihnen liegen als die ruhigeren Täler die Sätze die der Beschreibung oder der Betrachtung gewidmet sind. (ibid. pp. 141～142)

即ち VS 語順は物語を進展させるための代表的な形式である。この用法は本質的には(1)に述べ

た用法の特殊な場合に過ぎず、主として動詞に表現されている概念が圧倒的に重要であることによるものである。主語の概念の後退もこの場合に屢々文脈中で証明され外面的にはそれが既知であることで識別される。しかし主語が既知であることも必ずしも必要ではなく、動詞に表現されている概念が持つ重要性が新出の主語であってもより大きいことが、この種の文の含意の特質から由来しているのである。動詞は経過を示し物語の進展がそれに懸っている行動を指示する。動詞は既知の事実を追加され、物語を前進させる新しい出来事を含んでいる。それゆえ動詞が文中で最も重要であり、それに関心が集中する。この種の文はとりわけ叙事詩的描写に重要で、物語の流れの中で表現力が高まって行く波の山となる。その山と山の間により静かな谷間として描写や観察に当てられる文が介在している。

用例であるが、動詞の後に殆んど常に *thā* (=then, thereupon) と云う *particle* が置かれている。これは *Sanskrit* で *asti* の後に *locative* が置かれたり、又先掲の *Greek* の文中 *ἤθελον γὰρ οἱ Ἀθηναῖοι*……また *ἦν δέ ποτε καὶ πάλαι σολοῶς* など *VS* 語順の文では動詞の後主語の前に様々な *particle* や副詞句などが置かれるのは歴史的に極めて自然な措辞であったと考えられるのである。

—Gespræc *thā se gōda gylpworda sum* 第675行 (=Then brave Beowulf of the Geats made a boastful speech.)

—Geseah *hī in recede rinca manige*,…… (=He saw many men in the hall,……)

—Gyrede *hine Bēowulf eorlgewædum*……第1441行 (=Beowulf dons his armour……)

—Bær *thā sēo brimwylf*……第1506行 (=Then the she-wulf of the water bore……)

—Ongeat *thā se gōda grundwyrge*……第1518行 (=Then the brave man perceived the accursed monster of the deep,……)

—oferwearp *thā wērigmod wigena strengest*,……第1543行 (=Sick at heart, the strongest of warriors stumbled……)

—Heht *him thā gewyrcean wigendra hlēo*……第2337行 (=The warriors' protector then bade a curious shield be made for him ;)

—Oferhogode *thā hringa fengel, thæt*……第2345行 (=Then did the lord of rings disdain to……)

—Gesæt *thā on næsse nithheard cyning*……第2417行 (=So the king bold in war sat on the headland,……)

—Geseah *thā sigehrethig*……*magothegn modig*……第2756行 (=There, proud in triumph, the brave young retainer beheld,……)

—Alegdon *thā tōmiddes mārne thēoden hæleth hiofende* 第3141行 (=Then mighty men, lamenting, laid in its midst the famous prince,……)

それと同時に状景の描写や観察によって物語が中断された場合、物語はよく *VS* 語順で再開されると云う。その用例を引くと、第279行以降 *dragon* との格闘を描いた後、物語は次のように続

けられて行く。

—Dyde him of healse hring gyldenne thioden……第2809行 (=The brave-souled prince undid from off his neck the golden collar,……)

又第3077行以降の Wiglāf の観察や談話の後、筋は次のように進んで行く。

—Hēt thā gebēodan byre Wihstānes……第3110行 (=Then Weohstan's son bade orders be given)。

又予期しない抵抗が Grendel に与えた印象を第750行以下で叙した後、本筋の格闘の物語が次のように進められる。

—Gemunde thā se mōdga mæg Higelaces æfenspræce……第757行 (=Then Hygelac's brave kinsman was mindful of what he had said that evening ;)

又寄贈された武器について述べた後

—Heht thā eorla hlēo eahta mēaras……on flet teon……第1035行 (=Then the protector of nobles bade eight horses be brought into the hall,……)。

又火葬のため山と積み上げた薪を叙した後

—Het thā Hildeburh æt Hnæfes āde hire selfre sunu sweoloth befaestan……第1114行 (=Then Hildeburh ordered her own son to be given over to the flames at Hnæf's funeral pile……) 更にこの種の文の特色は運動の動詞が屢々現れることである。Ries はその用例を多数挙げている。

—Ymbēode thā ides Helminga……第620行 (=Then the lady of the Helmings sent round……)

—Gewiton him thā wigend wica neosian……)

—Gewiton him thā wigend wica neosian……第1125行 (=Then the warriors went off to visit their dwellings,……)

—gehwearf thā in Francna fæthm feorh cyninges……第1210行 (=Then the body of the king passed into the power of the Franks,……)

—Oferēode thā æthelinga bearn……第1408行 (Then the sons of nobles went over……)

—Cōm thā to lande lidmanna helm swithmōd swymman ; 第1623 (=Then came to land the seaman's chief, boldly swimming,……)

—ēode weorth Denum ætheling to yppan……第1814行 (=The noble honoured by the Danes went to the high seat……)

—Cwōm thā tō flōde felamōdigra……heap……第1888行 (=Thus to the water came the troop of most courageous liegemen ;……)

—Oferswam thā sioletha bigong sunu Ecgtheowes……第2367 (=Thus did the son of Ecgtheow swim back over the sea's expanse,……)

状況の描写や観察で中断した後、物語が運動の動詞で始まる用例も示されている。

Wulfgar が Hrothgar の用向きを391行以下で報告したのち——*Ārās thā se rica*……第399行
(Then the mighty chieftain rose……) Beowulf の *Wealtheow* への返答と彼等の成果の報告
の後——*ēode……frēolicu fōlcwēn tō hire frēan sittan* 第640行 (=The noble queen of the
people……went to sit by her lord.)

又見知らぬものたちが誰であるかと好奇心が海辺の番人を苦しめる状況を描写した後
——*Gewat him thā to waro the wicge ridan thegn Hrothgares*……第234行 (=Then he,
Hrothgar's officer, went off riding his horse to the shore ; ……)

VS 語順の持っている含意(2)についての Ries の記述は更に範囲を広げて行く。

ベオウルフの言語がその代表となりうる限りにおいて、古ゲルマン語においては、時制の体系が
よく発達している他の言語、例えばギリシャ語やラテン語、又フランス語では異なる時制で表現す
るところを、SV 語順と VS 語順を夫々特徴的に使い別けることによって意味の相異を表現して
いることに気付かざるを得ないと云う。即ち上にも触れたように、ベオウルフでは SV 語順を状
況描写や附随事情の報告に使用し、これに対して VS 語順を新しい要素の導入や物語の展開に役
立てているのである。このような場合に、フランス語に翻訳するとすれば SV 語順のところを
imparfait (=半過去) VS 語順のところを *passé défini* (=定過去=*passé simple* 単純過去とも云
う)を使用するであろうと思われる。例えば *situation* を表わす SV 語順に続き行動を示す VS
語順——*Werod eallārās* 第615行 (=The whole company rose) ——*Grette thā guma otherne,*
Hrōthgār Bēowulf,……第652～3行 (=Then the heroes Hrothgar and Beowulf saluted each
other,……) 序ながら Clark Hall の訳は第652～3にわたり意識であるが、先に引用した Quirk と
Wrenn の第652行だけの訳は (=Then the one man saluted the other.) となっており忠実な訳
であることを申し添える。さてこのところのフランス語訳であるが、*Tout le monde se levait ;*
alors salua……とするのが適切であろうと Ries は云うのである。兎も角もベオウルフでは状景を
描写するのに SV 語順を積み重ねて行き VS 語順で新たな物語の展開に入るのである。その好例
として、ベオウルフの出発を叙するくだりを挙げている。これは五行の SV 語順のあと六行目に
VS 語順が伴って、物語の新しい展開を計っている。

——*Floda wæs ythum*……第210行

——*beornas yearwe on stefn stigon* 第211行

——*streamas wundon, sund with sande* 第212行

——*secgas bāron on bearn nacan beorhte frætwe* 第213行

——*guman ūt scufon, weras on wilsith wudu bundenne* 第215行

——*Gewat thā ofer wægholm winde gefȳsed flota* 第217行

(The bark was on the waves,……The warriors well prepared, stepped on to the prow ;
streams of ocean made the sea eddy against the sand ; men bore into the bosom of the ship
bright armour,…… ; the heroes, the warriors on their eagerly sought adventure, pushed off
the vessel of braced timbers. Then……it floated over the billowing waves, urged onwards by

the wind……)

あるいは逆に行動を示す VS 語順が来て、ついで SV 語順によって附帯事象を描写する場合もある。——Hylde hine thā heathodéor 第688a (= Then the warrior brave in battle lay down,)

——hleobolster onfēng eorlas andwlitan 第688b (= the pillow received the hero's face,)

(3) VS 語順は文体に生彩を与える手段として、屢々対句法 (Parallelismus) や交叉対句法 (chiasmus) の修辭に使用される。対句法の例としては

——Gestoh thin fæder fæhthe mæste, wearth hē heatholafe to handbonan 第456～第460 (= Thy father brought about by fight the greatest of feuds; he was the slayer of Heatholaf……)

——wæron æthelingas eft tō leodum fuse to farenne, wolde feor thanon cuma collerferhth ceoles neosan 第1804行～第1805行 (= The nobles were eager to go back to their people, the mighty-hearted visitor wished to return to his ship, far from thence.)

又交叉対句法の例としては

——flota stille bād, seomode on sāle sidfæthmed scip 第301行～第302行 (= The ship remained still, the spacious vessel rode on the painter, held by its anchor.)

——Gamen eftāstāh, beorhtode bencsweg——第1160行～第1161行 (= Then mirth rose high, the noise of revelry was clearly heard;)

(4) 正常な語順 (=SV 語順) から外れることによって、文を際立たせ強勢を与える。Ries によると、VS 語順の示す含意(4)は強いて含意(1)及び(2)に含ませることが出来なくはないが、この場合は表現全体に強勢がかかって浮立つことが特色であると云う。用例は次のようなものである。

——Egsode eorl 第6行 (=He terrified the nobles,)

——Ählēop thā se gomela……第1397行 (=Then the veteran sprang up,——) ——wearp tha wundenmæl……yrre ōretta, thæt hit on eorthan læg……第1531行 (=Then the furious fighter cast aside the damasked sword,……so that it lay on the ground.)

そしてこのように文全体に強勢がかかる時には悲壮味が伴うことがあると云う。即ち——lixte se lēoma ofer landa fela 第311行 (=its radiance gleamed o'er many lands) ——hruron him tearas, blonden feaxum 第1872 (=tears streamed down the face of the grey-haired warrior.)

——ne gemealt him se mōdsefa……第2628行 (=His courage did not melt within him,)

尚この含意(4)は次のような強調文若しくは強意の否定文にも感じ取れると云う。

——Is mīn fletwerod, wiglēap gewanod 第476行 (=My troop in hall, my war-band is diminished)

——Hafast thū gefēred, thæt……第1221行 (=Thou hast brought it to pass that……)

——nis thæt seldguma wæpnum geweorthad 第249行 (=That is no retainer dignified by weapons,)

——Ne bith swylc cwēnlic theaw idese to efnane 第1940行 (=That is no queenly custom

for a woman to practise,) 尚この場合は否定の particle の ne が nis, næs のように融合せず Spitze を形成している。

—næs thæt ythe cēap to gegangenne gumena ænigum 第2415行 (=property not easy for any man to get possession of.)

これに対応する肯定の強調文もベオウルフに数多く見られるので, Beowulf の本文から補足的に引用することにする。

—wæs seo whil micel; 第146行 (=It was a long while.—wæs merefixa mod onhræd; 第549行 (The wrath of the sea-fishes was aroused;))

—wæs hira blæd scacen 第1124行 (Their glory had passed away.)

—wæs thæra Grendel sum, hearowearh hetelic, 第1266行 (=of whom Grendel was one, a hateful outcast-foe,)

—wæs thæt gewin tō strang, lāth ond longsum! 第134行 (=that strife was too strong, too hateful and long-lasting.)

尚このような用例は先に引用した Quirk と Wrenn の An Old English Grammar にも挙げられている外, Beowulf の影響が見られると云う同じく O. E. の叙事詩 Andreas の中にも散見されるのである。今その二, 三の用例を引用することになると—wæs thæt weatacen wide gefrege, geond tha burh bodad beorne manegum 第1119行~第1120行 (*筆者試訳=The sign of evil was well-known throughout the city announced by many a man.)

—wæs thæt æthele mod asundrad fram synnum (*=The noblehearted one was set free from sinns.)

—Is me feorgedal leofre mycle thonne theos lifcearo! 第1427行~第1428行 (*=Death is much better to me than wretched life.)

動詞と云った単一な文成文ではなく, 今挙げたように文全体を際立たせて強調する場合についての, Ries の説明を確認の意味で引用すると, Doch ist solche Nachdrucksverstärkung, emphatische oder pathetische Färbung auch bisweilen vorhanden, wo diese den ganzen Satz auszeichnet, ohne dass ein einzelnes Satzglied, wie in obigen Fällen das Verbum, vorzugweise hervorgehoben wäre. (ibid. p. 148)

これに関連して想起されるのが現代ドイツ語と現代アメリカ英語に見られる次のような表現である。

Habe ich Kopfschmerzen! (NHK やさしいドイツ語45年3月)

Bist du aber dumm! (Käthe Recheis)

.....

Was I glad.

Will he be surprised.

後者のアメリカ英語の用例については, アメリカの英語学者 Charles C. Fries は The Structure

of English (pp. 163~164) の中で次のように述べ、且疑問文を対比させて用例の Intonation Contours を与えている。

In these, the contrastive high pitch extends over several syllables before the final drop and the vowels are often considerably lengthened.

Nonquestion	Question
Was he mad.	Was he mad
Will he be surprised.	Will he be surprised.

又今一人のアメリカの英語学者の James Sledd は A Short Introduction to English Grammar (p. 181) で、同じく疑問文と対比させながら同様の構文に対して次のような Inonation を与えている。

2	3	1
Question : Wère + you + angry ↘		
4	∨	4'
Exclamation : Wère + you + angry ↘	∨	2

Fries と Sledd とを比較すると、Nonquestion を Exclamation と呼んだのは文の性質をより適切に表現したことを除けば、両者の記述は共通である。そこで先に挙げた Ries の記述と今挙げたアメリカの両英語学者の記述とを併せ考えるならば、古代ゲルマン語を代表しているとも見るべき O. E. の叙事詩 Beowulf や Andreas の中に見られる強調的表現と現代ドイツ語と現代アメリカ英語に見られる exclamatory expressions とは、互に900年の歳月を距てながら構造的に同一であると断じて差支えないと考えられるのである。尚 Brian Foster はその著 The Changing English Language (p. 95) で Am I tired! や Could I use a beer! などのアメリカ口語英語の表現が War das ein Tag. (from a novel by Heinrich Böll) などのドイツ語の表現の翻訳口調としてドイツ系アメリカ移民によって口頭で (by word of mouth) アメリカ英語に持込まれたものとして、いとも明快に説明し、今ではイギリスの口語英語にも広く使用されるに至っていると述べている。しかし元来 war das ein Tag. Ist der aber froh! (あいつの喜びようったら——相良守峯：ドイツ文法 p. 238) など今云うドイツ語の感歎文が Beowulf などに見られる強調表現の系統を引く古代ゲルマン以来の表現であることは確実であるし又英語の表現にしても What a piece of work is a man! (Shakespeare) など倒置した感歎文が以前からあり、Brian Foster の明快な説明をそのまま受入れることは躊躇されるのである。恐らく米独もしくは英独両語に跨ったこれらの表現の実際の由来は、もっと複雑な経路を辿って発達したものと考えるのが妥当であろう。Beowulf における VS 語順の含意については Ries は更に詳細にわたって書いているのであるが、主要なものについては以上で触れたのでこれ位にしたいと思う。

先に引用した K. Brugmann の印欧語比較文法 (Kurze vergleichende Grammatik der Indogermanischen Sprache (p. 683) による VS 語順が広く維持されている言語にはゲルマン語と並んでスラヴ語があると云う。

そこで代表的なスラヴ語の一つのロシア語における VS 語順を、主として E. M. Borras と R. F. Christian の *Russian Syntax* を拠所としながら検討して見たい。

無論等しく印欧語系に属すると云っても、スラヴ語系とゲルマン語系あるいはラテン語系では日常の単純な表現にも発想法の相異が見られる。例えば、

- I have two brothers. (English)
J'ai deux frères. (French)
Tengo dos hermanos. (Spanish)
Ich habe zwei Brüder. (German) に対し
U menja dva brata. (Russian)
又 I have a headache. (English)
J'ai mal à la tête. (French)
Tengo dolor de cabeza. (Spanish)
Ich habe Kopfschmerzen. (German) に対し
U menja bolit golova. (Russian)

但しロシア語にも *On stradaet ot zubnoj boli.* (=He is suffering from toothache) と云う表現もある (ibid. p. 431)。

上に記したのはヨーロッパ主要言語とロシア語との間にある発想法の相異の例であるが、倒置法についても英語やドイツ語とロシア語では必ずしも同じではない。例えば *never before, nowhere, scarcely, seldom* などの否定的又は準否定的副詞的規定語が文頭に立つときには、英語では VS 語順又は vSV 語順が必須であるに対して、ロシア語では倒置するしないは任意で、その選択は純然たる文体的なものであるとされる。即ち二、三の用例を引くと、(以下断りなき限り、用例は前掲書からの引用)

No nikogda Lui Ru, so dnja smerti svoego ottsa, ne podxodil blizko k dostroennym kofejnjam, i ni razu on ne proboval rubinovyx nastock. (Erenburg)

(But never, since the day of his father's death, had Louis Roux gone near the completed cafe's and not once had he tried the ruby brandies.)

Nikogda do six por ne stupala noga Rodiona na chuzhuju zemlju. (Katajev)
(Never before had Rodion's foot trod on foreign soil.)

Edva konchilas' skarlatina, nachalos' vospalenie ljogkix (Katajev)
(Scarcely had the scarlet fever passed, when pneumonia set in.)

No edva mal'chik, razbezhavshis', bulyxnulcja v more…… (Katajev)
(But scarcely had the boy taken a running dive into the sea……)

即ちロシア語では *nikogda……ne* (=never) と *edva* (=scarcely) が文頭に立って夫々 SV 語

順になる場合と VS 語順になる場合との四例になっている。

又注意されることは、英語などでは異った **syntax** 上の操作 (**operation**) をするところをロシア語では語順で表現することである。この点に関して **Borras** と **Christian** の述べているところを引用すると、*The freedom of Russian word-order may be exploited to express varied shades of meaning and emphasis which are expressed in English by methods less neat than the transposition of words or may even be incapable of expression. In addition, certain syntactical deficiencies of Russian may be offset by the manner in which the various parts of the sentence are arranged.* (ibid. p. 366)

例えば *There was a rainfall. The rain came on.* のような場合の定冠詞と不定冠詞の相異を冠詞を持たない所謂 ‘zero-article’ のロシア語は語順で表現するのである。**Borras** と **Christian** から引用すると、

Groza razrazilas', kogda my shli domoj.

(The thunderstorm stroke as we were walking home.)

Zagremel grom. (It began to thunder.) つまり、文頭に立った **groza** (=the thunderstorm) は definite な表現であるが、文末に来た **grom** (=a thunder) は indefinite な表現となるのである。尚栗原成郎氏は **NHK** ロシア語入門 (昭和44年3月) で同様の趣旨のことを書いて居られる。即ち、情報伝達の目的から見たロシア語の語順は、＜既知のもの＞が文頭に、＜未知のもの＞が文末に来るのが客観的な順序であると。栗原氏は又その文中に英、独、露を対照した文例を引いて居られるので、ここに引用させて頂くと、

(a) 英 A man came round the corner.

独 An der Ecke erschien ein Mann.

露 Iz-za uglá vyshel (pojavitcja) chelovék.

仏 Une femme sortit de la chambre.

露 Iz kómnatu vyshlá zhénshshna.

(b) 英 The man still stood at the corner.

独 Der Mann stand immer noch an der Ecke.

露 Chelovék vcjo eshshjo stojal na uglú.

仏 La femme sortit de la chambre.

露 Zhenshshina byshla iz kómmatu.

即ち、上掲の文例では不定冠詞 (indefinite article) のついた主語はロシア語訳では文末に置かれ、定冠詞 (definite article) のついた主語はロシア語訳では文頭に來ていることが注意されるのである。**Borras** と **Christian** は更にこれに関連して次のように述べて、用例を挙げている (ibid. p. 380)。

Inverted order may also express the indefiniteness of future time, compared with the definiteness of past time, expressed by non-inverted order :

Kogdá véter podúl s sévera……

(When the wind blew up from the north……)

Ėsli podúet véter s sévera……

(If a wind blows up from the north……)

ロシア語の語順に関して、大体以上のようなことを前提に置いて、本節に戻ってロシア語における VS 語順を検討して行きたい。

再び Borras と Christian より引用すると、次のように書かれている。

The inversion of subject and verb occurs commonly at the beginning of a story when the author is setting the scene or bringing the reader into the course of events :

又文例として次のようなのが引かれている。

Techjot reká k mórju, idjot god za gódom. Kozhdyi god zelenéet k besné séryi les nad Dnestrom i Reumon. (Bunin)

(The river flows to the sea, year follows year. Every year, with the approach of spring, the grey forest above the Dniester and Reuth grows green.)

この辺は筆者をして *asti* や *āstid* で始まる Sanskrit の説話を回想せしめるのであるが、筆者も自分で読んだ U. M. Garshin の短篇 *Skazanie o gordom Aggee* から一例を引きたいと思う。この短篇はある驕れる領主についての説話で、トルストイの民話から取材されたと云われているが、神は剛慢なその領主を罰するため、彼を乞食姿で国中を放浪させ天使が代りに夫の姿になって彼の妻と同居しながら慈愛の政治を行うと云う話である。この説話は次のような書出しで始められている。(念のため VS 語順のところは *Italic* 体とすることにする。)

Zhil v nekotoroj strane pravitel' ; zvali ego Aggej. Byl on slaven i silen : dal emu gospod' polnuju vlast' nad stranoju ; vragi ego bojalis' druzej u nego ne bylo, a narod vo vsej oblasti smirno, znaja silu svoego pravitelja. I vozgordilsja pravitel', i stal on dumat', shto nikogo net na svete sil'nee i mudree ego.

(中村融訳：ある地方に領主がいて、その名をアゲイと云った。彼は名声も高く、偉力も強かった——国王はその地方の全権を彼に委ねていた。彼は仇敵からも恐れ憚られ、親しい友とてなかったが、その地方の住民は、己が領主の威力を知っておとなしく暮していた。領主はいつしか心驕り、はてはこの世に己れより強い、賢い者はないと考えるに至った。ガルシン全集下巻342頁)

この短篇を読むとガルシンの他の短篇と比較して単にその発端ばかりでなく説話の途中でも格段に倒置文即ち VS 語順が多かったことが筆者の印象に残っている。すなわち Ries や Brugmann の所謂 *in der Weiterführung der Erzählung* 物語りの展開されてゆくところに VS 語順が用いられていることに気付くのである。今この説話から二、三の用例を引くと、

Gonjalsja on za nim poldnja ; vidit nakonets, shto olen' k reke bezhit.

(中村：彼は半日、鹿を追いつけた。最後に眼をやって見ると、鹿は河の方へ走って行く。)

Stupil kon' b bodu, shagnul tri raza i ushjol v bodu po sheju, a dal'she noga i dna ne dostaet. Povernul Aggei nazad na bereg, dumaet : ……

(中村訳：馬は水中に進み、三步踏み出して頸まで水に浸したが、その先は、脚がもう底に届かない。アゲイは岸に戻って、考えた……)

Razgenevalsja gospod' na Aggeja. Prizval on k sebe angela i povelel emu, prinav na sebja vid Aggeev, odet'sja v ego plat'e, sest' na konja e exat' v gorod. i ispolnil angel volju gospodnju po s'ovu ego.

(中村訳：神さまは、アゲイに対して立腹された。神は天使を呼ばれ、アゲイの姿を装い、彼の服を着、馬に乗って町へ行けと命じられた。そして天使は神のみ言葉通り、その意志を履行した。)

再度 **Borras** と **Christian** を引合いに出すことになるが、彼等は物語りの始めの語順に関して更に次のように云っている。

The author does not, however, invert subject and verb if he wishes to begin his story without preamble. Such a beginning in Russian often corresponds to the beginning of an English story with the definite article, when the author does not trouble to proceed from the unknown to the known : その例として

Gosti davno raz'exalis' (Turgenev)

(The guests had long since departed.)

Restoran opustel. Ostalis' tol'ko ja i Leonid Antonovich. (Kuprin)

(The restaurant was empty. Only Leonid Antonovich and I remained.)

この辺は **Beowulf** の発端を想わしめるものがある。次にロシア語の VS 語順について言及すべきことは、既に物語りの新しい展開に関する上記の用例からも推知されることであるが、運動や出来事の発表に関する動詞は VS 語順をとり易いことである。そのような動詞の例を挙げると *nastupat'*, *nastavat'* (to come), *byt'*, *byvat'*, (to be), *proxodit'* (to pass), *sluchat'ja*, *proisxodit'* (to happen), *vcpyxivat'* (to break), *voznikat'* (to appear) 等々であると云われる (ibid. pp. 378~80)。

用例を引くと：

Nastanet vremja, ja vam bol'she ne budu rabom. (A time will come when I shall be no longer your slave.)

Nastupila osen'. (Katajev) (Autumn came.)

Byvajut strannie sluchaj. (Strange things happen.)

Proizoshol neschastnyi sluchai. (An accident happened.)

Vspyxnul pozhal. (A fire broke out.)

voznikla u nego blesstjashshaja mysl'. (A brilliant idea came to him.)

後 書 き

以上紙巾の 関係で終りのところを少し 端折らねばならなかったが、途中多少の 逸脱をしながらも、Brugmann, Ries, そして Borrás & Christian を拠所としながら VS 語順の持つ二、三の含意として一本糸を通したと考えているのである。

以 上

主 な る 参 考 文 献

- 榊亮三郎：梵語学 種智院大学出版部 昭和33年
A. A. Mac Donell : A Sanskrit Grammar (Oxford 1955)
M. M. Williams : A Sanskrit-English Dictionary (Oxford 1956)
Karl Brugmann : Kurze Vergleichende Grammatik der Indogermanischen Sprache (Walter de Gruyter Ltd. 1958)
John Ries : Die Wortstellung im Beowulf (Verlag Von Max-Niemeyer 1907)
F. Klaeber : Beowulf (Heath & Co. 1950)
C. L. Wrenn : Beowulf (George Harrap & Co. 1964)
John R. Clark Hall : Beowulf (George Allen & Unwin Ltd 1964)
Kenneth R. Brooks : Andreas (Oxford 1933)
R. Quirk & C. L. Wrenn : An Old English Grammar (Methuen & Co. Ltd. 1963)
O. Jespersen : Growth and Structure of the English Language (B. G. Teubner 1930)
C. C. Fries : The Structure of English (Harcourt, Brace & Co. 1952)
James Sledd : A Short Introduction to English Grammar (Scott, Fores mar & Co. 158)
Brian Foster : The Changing English Language (Renguin Books 1970)
I. A. Nairn : Greek through Reading (Ginn & Co. Ltd. 1063)
相良守峯：ドイツ文法 (岩波書店 1951)
F. N. Borrás & R. F. Christion : Russian Syntax (Oxford 1959)
B. M. Garshin : Sochinenija (Moskva Leningrad 1960)
中村融 (訳) ガルシン全集下巻 (創芸社昭和25年)

(著者 一般教養 昭和45年11月30日受理)